

執筆者一覧（掲載順）

- | | |
|------|--|
| 河野通明 | 神奈川大学 名誉教授 |
| 鈴木陽一 | 非文字資料研究センター研究員
神奈川大学外国語学部中国語学科教授 |
| 中林広一 | 非文字資料研究センター研究員
神奈川大学国際日本学部国際文化交流学科准教授 |

■編集後記

『非文字資料研究』21号をお届けします。今号は通常の論考の掲載に加えて、第四期の各研究班による活動報告も掲載しております。第四期の3年間を通じて各班がいかなる共同研究を行ったのか、ひいては非文字資料研究センターがどのような成果を世に送り出してきたのか、これらの報告から見えてくるかと思えます。

今号の冒頭でセンター長が述べているように第四期の活動も多岐にわたりますが、絵引や非文字資料研究叢書を始めた各種刊行物の出版が行われただけでなく、「仁川チャイナタウン写真展」が開催されるなど専門家のみならず一般の人々にも成果を還元する企画が実現したことは特筆すべきことだと思います。加えて述べれば、この間、非文字資料研究叢書の1つである『国策紙芝居からみる日本の戦争』が日本児童文学学会特別賞や堀尾青史賞を受賞しております。これも単に研究成果が高く評価されたということだけにとどまらず、これが非文字資料の魅力をより広く伝える機会となりえたという意味において喜ばしいことと言えましょう。

一方で今号に掲載された個人研究論文の内、鈴木陽一氏と中林による論考は第四期の研究活動を受けてなされた成果の一部でもあります。このように本誌もまた研究成果の公開を担う存在ではありますが、今後ともその自覚を強く持ち、その責務を果たし続けてまいりたいと考えております。お気づきの点がございましたらぜひご指摘・ご批判等賜れば幸いです。(中林)

■表紙説明

今号の表紙・裏表紙の図は韓国の在来犁である。韓国の在来犁の研究は、日本の植民地時代に朝鮮総督府関係の日本人研究者によって始められ、調査報告書にスケッチ図が載せられているが、それを丹念に収集したのが元韓国仁荷大学校教授の金光彦氏の『韓国農器具攷』(1986)である。表紙下部の上の図(吉川祐輝 1904)は二頭引き犁で大きな犁先が特徴で重さ18kgほどあり、日本の在来犁1台の重さである。この重さで二頭引き犁特有の犁体の浮き上がり効果を押さえ込んでいる。下図(三成文一郎 1905)も二頭引き犁で朝鮮半島北部で使われた。裏表紙は上図も下図(三成 1905)も三角枠の二頭引き犁で、半島南部で多く使われ、耕起する際に犁先が前倒剥がれを起こして外れるのを防ぐため、犁先押さえ木が付いている。日本の犁耕はこうした朝鮮半島の犁を牛とセットで渡来人が持ち込んだことで始まったため、日本の犁の形から朝鮮半島のどのタイプがどの県のどこに伝わったが5世紀、7世紀に分けて復原できるので、いずれ分布図を作って韓国の研究者に見てもらいたいと思っている。政治の世界では日韓関係は冷え込んでいるが、研究界では交流を深めていこうではないか。(河野)

非文字資料研究 第21号

The Study of Nonwritten Cultural Materials No.21

発行日	2020年9月30日
編集・発行	神奈川県立文化研究所 非文字資料研究センター 〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1 http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/
印刷	共立速記印刷株式会社
雑誌コード	ISSN 2432-5481